

生徒指導…点と線

リーダーズミーティングより

2019.04.02

No.60

校長 渡邊 幸二

“働き方改革を！”なんて言っておきながら、昨日のリーダーズミーティングが終わったのは6時を回ってしまいました。申し訳ありません。



しかし、各リーダーから出された協議事項は実に前向きで、しかもポイントが整理されていて、何をどんな方向で話し合うべきかが非常にわかりやすいものでした。これまで多くの会議を経験してきましたが、実にレベルの高いミーティングを展開してくださいました。これも各リーダーが「ラストマン」として積極的に思考し、実践化を図ろうとしてくださっているからだと思います。本当に嬉しく思ったし感謝したいし、また実に頼もしく感じました。

生徒指導の「点」を「線」へ

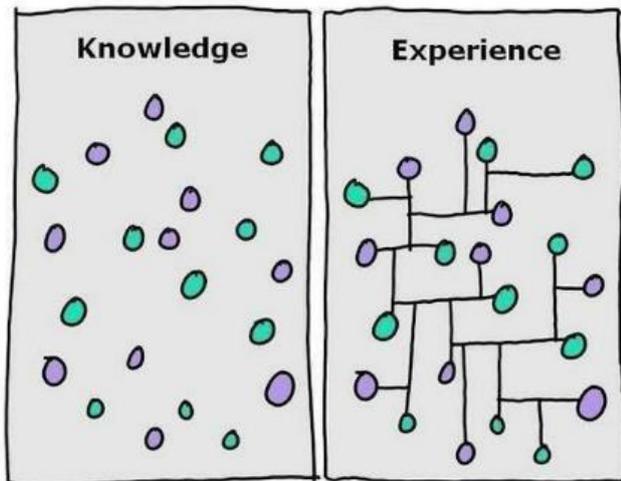
まるで松本清張のミステリーのようなタイトルですが、普段われわれが使っている教育用語でわかりやすく言えば「それはそれ」から「すべてつながっている」にしましょうということです。

これはBチームリーダーのG. K教諭の提案だったのですが、“ナルホド！”と思える説明でした。公教諭のこれまでの経験によると、学級がうまくまとまらない、ばらばらでルールを守らないような崩れた学級になっている原因のひとつに、「給食のルール」が守られていないことがあったと言うのです。学校生活においては小さなきまりで、学級によって大きく違っていたりするルールのようなのですが、案外これがとても重要だったという説明でした。まさしく「魂は細部に宿る」なんだそうです。

この話を聞いて思い出したことがありました。浜田スポーツ少年団の入団式でのことです。私はあいさつで「スポーツにおいてルールを守ること」と「学校生活でルールを守ること」は同じです、と語りかけました。実際スポーツ少年団の入団心得〔日本スポーツ少年団の目的〕の中に次のような一文があります。「わたしたちは、ルールを守り、他人に迷惑をかけない、立派な人間になります。」と…。スポ少では一生懸命だけど、普段の生活がいい加減な子どもっています、それはダメなことです。スポ少でも、普段の生活でも自分の心と体を鍛えることが重要ということだと思うのです。それはそれじゃないってことです。おそらく一流の選手は、スポーツに対する姿勢も、普段の生活・生き方に関しても真面目なんだと思います。



子どものじりつを阻害している「学校のきまり」



子どもたちの自立を阻害している生徒指導の在り方に、われわれの指導自体が「点」になっていたという主張もありました。K. H教諭の指摘で、たとえば浜田小学校の生活のきまりがあまりにも細かすぎるために、つまりきまりがあまりにもピンポイント(点)過ぎるために子どもが自分で考えた行動をしていないという事実です。たとえばきまりの中に「使ったボールや一輪車、竹馬は、きちんと後片付

けをします。」があります。こういうきまりだと次のように嘯く子どもがいるという指摘です。「ぼくたちはボールとか竹馬は使っていません。使ったのは○○です！」と。頭にきますよね！でもその元のルールを作ったのはわれわれです。こういうきまりについてもどうあるべきか、保護者(P T A)や、ルールを守る主体者である子どもたちと話し合う必要があります。「浜田っ子は、他人に嫌なことや迷惑なことをせず、みんなのためになること(公益・貢献)を積極的に行います。」なんていう大雑把な枠組みの方がいいのかもしれない。

学級王国になっている学級

おそらく学級王国になっている学級は、「それはそれ」という枠組みが刷り込まれた学級を言うのかもしれませんが。「担任の先生の言うことはきく」けど、他の先生の話だときけないのは、担任の顔色をうかがう、忖度ばかりしている子どもです。本当の意味がわからない、まさしく点、それはその思考・判断です。

昨日、「浜田小学校の組織と運営」の中で、

私たちが学校教育に於いてめざしていかなければならないことは、子どもたちがやがて社会に出る際に「自立・貢献できる人」となるように育成することである。

ここ浜田という地で、目の前の子どもたちの実態から考えて言えば、「じりつ(自立・自律)と公益・貢献」できる人を育成することである。そのための教育目標として「自ら考え、自らの力で生きる子どもを育てる」と設定した。教員は単に「勉強を教えればよい」のではない。学校行事や日々の授業を通して、前述のような子どもたちを育てるということを常に意識してほしい。



ボクダッテ、考エテルサ…

と述べましたが、私たちは「ルールを守る」だけの子どもを育てているではありません。 「やがて社会に出る際に『自立・貢献できる人』となるように」教育を施さねばならないのです。そのためのルールであるだろうし、大きな枠組みの中で自由に考え生きていくことを教えるのです。ここでも「目的」と「手段」をしっかり意識して指導しなければならないと思います。